

■世界自然遺産の島の市街地の景観

—名瀬のまちと大島紬と織エアパート群—

鹿児島大学工学部建築学科

小山 雄資

1. はじめに

鹿児島県本土の南方から台湾の東方にかけての洋上に連なる南西諸島のうち「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」が2021年7月、世界自然遺産として登録された(図1)。鹿児島ではこの年末年始、新聞・テレビなどのメディアで関連する記事や番組が多く見られた。他の地域ではいかがだっただろうか。

国内では他に4つの地域(知床、白神山地、屋久島、小笠原諸島)が世界自然遺産に登録されているが、今回の登録地は市街地や集落に近いことが特徴とされている。ただ、人工物からなる市街地の景観は、自然遺産を評価する文脈にはなじみにくいところがある。たとえば、希少生物の生息地へむかう道路やトンネル、宿泊滞在地となる市街地の建築群は、自然遺産とは関係がないどころか、好ましくない景観とさえ見なされるかもしれない。

本稿では、世界自然遺産の登録にともない、これから多くの人が目にする事となる奄美大島の中心都市・名瀬のまちの景観について、遺産保護にかかわる「環境文化」の観点から見直してみたい。

2. 世界自然遺産の保護にかかわる「環境文化」

世界自然遺産の登録に先立つ保護措置として2017年3月、「奄美群島国立公園」が指定されている。その際に導入されたのが「環境文化」の概念である。奄美地域における自然資源の保全・活用に関する基本的な考え方を示した環境省の資料(2008)を参照すると、環境文化とは「固有の自然環境の中で、歴史的につくり上げられてきた自然と人間のかかわりの過程と結果の総体、つまり、

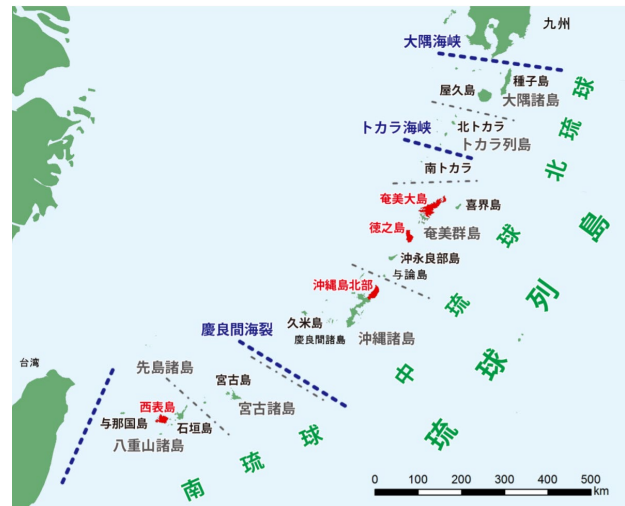


図1：南西諸島(琉球弧)のなかの奄美群島

赤い部分が世界自然遺産の登録地を含む4島

(文献3より転載)

島の人々が島の自然とかわり、相互に影響を加え合いながら形成、獲得してきた意識及び生活・生産様式の総体」を指している。

この「環境文化」はもともと屋久島の環境文化村構想で提唱された概念であり、その仕掛人でもあった小野寺浩(2020)によれば、奄美ではこれまでの国立公園にはなかった新しい考え方として導入されている。従来の国立公園は、大自然の風景や手つかずの自然が評価され指定されてきた。一方、奄美の森は一見すると自然林のようだが、実は二次林が9割以上を占めている。また地形的にも、保護対象の希少野生動植物の分布範囲が人々の居住域に近い。そこで、これまで営まれてきた伝統的な暮らしを維持していくことが希少種の保全にもつながるという考え方が重視されているという。

つまり、世界自然遺産として評価された価値(今回の登録における評価基準は「生物多様性」)の保護は、都市や集落の生活環境のあり方と大きく関係してくる。

3. 奄美群島の社会環境と戦後の振興開発事業

奄美群島は、古くから黒潮や季節風を利用した交通や交易の中継地として、南と北からの文化が重なり合う地であった。境界領域としての地理は、歴史にも独自性を与えている。たとえば、集落ごとに社会を形成していた奄美世（あまんゆ）から、琉球王府の支配を受けた那覇世（なはんゆ）、薩摩藩侵攻後の大和世（やまとんゆ）、そして戦後に米軍統治下におかれたアメリカ世（あめりかゆ）といった時代区分の名称にもその独自性があらわれている。こうした被支配の歴史的経緯を含む社会環境上の条件は、奄美における環境文化の重層的な理解において欠かすことができない。

戦後、日本への復帰は沖縄よりも早い1958年のことであった。「行政分離」された期間は本土との往来や交易が途絶え、日本政府からの補助が停止していたため、戦災からの復興も停滞し、経済や生活は困窮していた。復帰後、自然的・社会的条件の不利性に起因する本土との格差をふまえ、復興（のちに、振興、振興開発と名を変えて継続）の都市基盤・施設整備の事業が展開することとなった。奄振（あましん）と呼ばれる諸事業を通じて、道路やトンネル、港湾や埋立地、校舎や体育館、産業振興のための諸施設が奄美群島各地に建設された。

その結果、群島内の市街地から集落、農地や山林にいたる各所に過去60年以上にわたって整備された都市基盤と各種施設が存在し、それらが景観としての一要素を構成している（小山2015）。

4. 「都市的」な名瀬のまち

奄美群島全体の人口約10万人のうち、5.8万人が群島最大の島、奄美大島に暮らしている。そのうち3.5万人が旧名瀬市（奄美市名瀬、2020国勢調査）の人口にあたるが、名瀬にはこの規模の都市としては密度や文化の面で「都市らしい」印象を受ける市街地がある。

名瀬の市街地は近世末期に薩摩藩の代官所が大島北部の赤木名から移転してきてから発展した。近代に入って国や県の各種機関や教育施設が立地し、群島の内外から人が集まる地となった。さらに、重要航路にある名瀬港には多くの寄留商人が集まり、商業活動が隆盛した。ちなみに、鹿児島県内で天文館に次ぐ繁華街とされる「やんご通り」は、このような人々を相手にしてまちに散在

していた料理屋が明治末期に集団移転して形成されたという（弓削政己ほか「名瀬のまち いまむかし」2012年）。

名瀬の市街地はいまもむかしも人口密度が高い。奄美大島の集落は山を背に海に面していることが多く、独立性が高いこともあって「シマ」と呼ばれるが、名瀬もそのひとつである。平坦地が狭いために山裾や谷にも多くの住宅が立地する。1965年の国勢調査によれば、当時の名瀬市の人口集中地区（DID）には3.5万人が暮らしており、その密度（165.9人/ha）は鹿児島や大阪を上まわり、東京区部（172.6人/ha）に匹敵していた。ひっ迫する住宅事情は、今も公営住宅ストックの多さとその割合の高さ（約14%）としてあらわれている。

現在、名瀬の市街地では区画整理と海面埋立の事業が進行しており、まちの密度も変化しつつある。とはいえ、宿泊先から歩いてまわれる範囲には飲み屋に加え、たとえば古書店や複数の喫茶店などがまだある。それらを巡り地元の新聞（県紙以外に群島内2紙ある）を読みつつコーヒーをすするのが筆者にとっては名瀬滞在時の楽しみとなっている。同じように、奄美で仕事をご一緒する島外の知人は、名瀬に来るとレコード店をいつも訪ねていて、民謡の新曲が出ていると嬉しそう語る。こうした文化的な店が成立していることも都市らしさを感じさせる理由である。

5. 奄美群島の戦後建築「群」

戦後復興から高度成長にかけての建造物のなかには、文化的な価値が認められるものも出てきている。奄美における戦後の歴史をふまえれば、当時の建築も奄美独自の環境文化を反映したものとして注目できる。

2018・19年度の2か年にわたり、鹿児島県内を対象に近現代建造物緊急重点調査が実施された。これは文化庁が2015年度に新たに着手した文化財建造物の全国調査であり、近代化遺産や近代和風建築の調査がほぼ完了したことを受け、これら調査の対象の時代につづく1945年から2000年までの建造物を対象としたものである。調査は、鹿児島県建築士会のヘリテージマネージャー、日本建築家協会、日本建築学会（鹿児島大学等）の混成チームで実施された。

一次調査で作成されたりリストと二次調査の所見は『近現代建造物緊急重点調査(建築)報告書（鹿児島県編）』

(2020年)に収録されている。一次リストの全455件のうち、もっとも多いのは鹿児島市(155件)であるが、次に多いのは奄美市(28件)であり、奄美群島全体で見ると65件ある。このうち二次調査の対象となったのは、本土復帰後の復興事業で建設されたブロック造校舎、1950年代のRC造カトリック教会堂、名瀬の大島紬工場と織工アパート、笠利崎の灯台である。学校や教会堂は、集落(シマ)など小さな圏域を単位としてなりたっている建築であり、織工アパートは名瀬の市街地を中心に複数ある。これらはいずれも建築群として存在することが特徴である。

6. 大島紬の「織工アパート」群

奄美大島には、日本の染色織物として最も古い伝統を持つとされる大島紬がある。その生産は、1960～1970年代に急成長した。現在はかつてのような盛況にはないが、名瀬の市街地では当時の名残をみることができる。今回はそのなかでも「織工アパート」や「紬ビル」と呼ばれている集合住宅をご紹介します。

織工アパートは、1960～70年代前半に、優秀な織工を確保しようと雇用主の機屋(織元)によって競って建設された建築群である。紬工場の近くに住戸のみの別棟で建っている場合と、工場と同一建物で上階に住戸を有する場合とがあり、両形式をあわせると名瀬の市街地に30棟以上現存している(図2)。

名瀬の市街地は、限られた平坦地に人口が集中し、戦後もたび重なる大火や風水害に見舞われており、織工アパートは住宅の不燃化・共同化を先導する存在でもあった。実際、その多くは建設時に住宅金融公庫や雇用促進事業団の建設融資を受けて形成された住宅ストックである。一見ただけでは他都市にもあるごく普通の集合住宅である。しかし壁面や出入口に記された織元名からそれが織工アパートであるとわかる(写真1)。

奄美大島で50代以上の方とお話すると「家で紬を織って子どもたちを高校や大学に行かせた」あるいは「行かせてもらった」ということをよく聞く。野元ら(2014)の調査で、織工アパートには織り機の大きさ(幅880×奥行1410)を考慮した板の間をもつ住戸があることが報告されている。板の間の長手方向は隣接する4畳半に合わせた1間半であるのに対して、短手方向は半間よりも

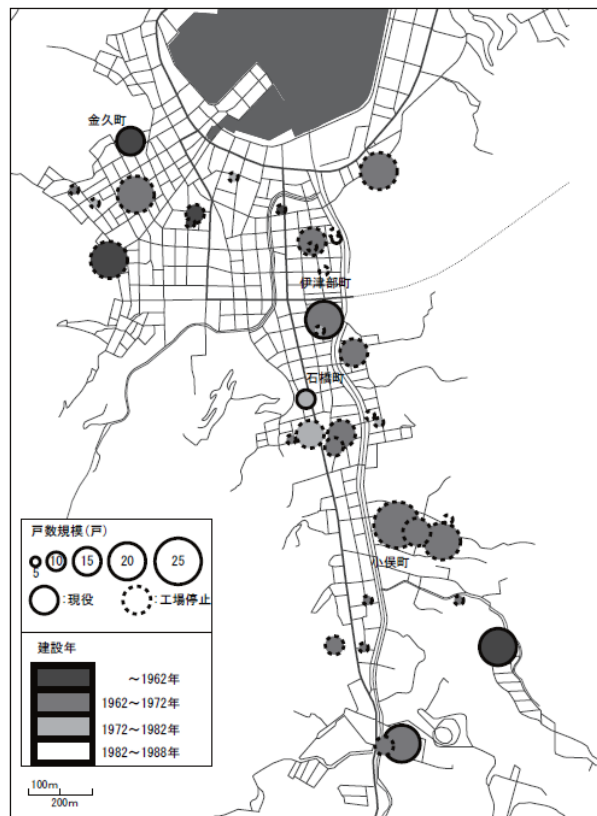


図2：名瀬の市街地に分布する織工アパート

2013年の調査による(文献4より転載)



写真1：名瀬の市街地に建つ織工アパート

住棟壁面に織元名が見えるのが織工アパートである

やや長く、織り作業の寸法にもとづいて設計されたと考えられる(図3)。これは工場外での家内労働(外機=そとばた)に対応した住戸計画であり、他では見られない建築上の特徴である。

上述した緊急調査において2次調査の対象とした紬工

場と織工アパートを以下に具体的に報告させていただく。

(株)伊集院織物の社屋は工場兼経営者の住居として1964(昭和39)年に建設された。当時の奄美では珍しかったRC造の2階建てで、平面は間口6.5m、奥行25m、南北に長い。西面の1階片廊下は南側に建つ集合住宅内まで延び全長32mあり、糸の糸を張る作業に必要な寸法(1疋=24.39m, 2反分)が確保されている。1階には糸の生産工程別に図案室、加工場、染色室などが配され、2階の織工場は現在も使用されている。そして、この社屋の南側に建つ伊集院ビルが織工アパートに該当する(写真2)。こちらは従業員のための集合住宅として1972(昭和47)年に建設された。RC造5階建てで南面中央の階段室から各階にアクセスする。平面は雁行しており2面~4面採光の14戸の専用住戸で構成されている。北側の織工場と1階で接続しているほか、かつては各戸に工場と連絡しあうインターホン設備があり、職住近接の生活形態を反映している。当初は給与住宅として織工とその家族が入居していたが、糸の生産縮小とともに一般の賃貸住宅へと転換していった。



図3：織機スペースのある住戸の例(文献5)

階段室型の標準的な2DKに類似しているが、織り機の設置を想定した板の間に織工アパートの特徴がみられる

7. 近現代の環境文化を物語る「織工アパート」群

大島糸の生産量が激減して長い時間が経ち、糸にかかわる目に見える景観も少しずつ失われてきた。川の近くに建つ工場を見て、糸の糊張の作業に川辺を利用し、染色後のすすぎに水流を利用していた記憶やその光景を蘇らせる人は少なくなっている。一方で、まちの背後の山裾にはいまでも泥田がある(大島糸の生産工程に泥染めがある)。このような記憶や遺構と結びつけて織工アパートを理解すると、名瀬のまちに展開していた生業や生活を具体的に物語る建築として重要性を帯びてくる。

さらに、都市計画史としても興味深いのは、1960年以降に埋立によって拡大した市街地に町工場が移転していくなかで、糸工場のほとんどがもとのまちに残ったことである。他の産業と同じように集団移転の計画もあったが、部分的な実現にとどまった。これは住まいと結びついた糸生産特有の労働形態や当時の織元の政治力や経済力などが背景にあったことが考えられる。

大島糸の生産にかかわる景観がまちから消えていくなかで、建築群として現存する織工アパートは、名瀬の近現代の環境文化を反映した建築とみなすことができる。



写真2：織工アパートの例：伊集院ビル
北側に別棟で建つ糸工場と1階部分で接続している

8. むすび

2016年の調査で名瀬のまちを学生と歩いていた際、道端の織工アパートの1階住戸から機織りの音が聞こえてきたのでお話をうかがってみると、別の織元でかつて織工として働いていた方がお住まいだった。市街地で職住近接を実現する建築形態として成立した織工アパートは、一般の賃貸住宅として今も数多く現存する。立地に恵まれ、賃料が比較的安いことから、一定の入居需要がある。しかし、建設から50年近く経ち、建物の老朽化も目立つ。また、高齢化した入居者の生活支援も今後は必要になってくると考えられる。

世界自然遺産の保護に際して注目される環境文化は、集落の環境やそこでの伝統的な慣習と関連づけて理解されるものである。しかし、織工アパートのように、市街地や人工的・現代的な建造物にも、この地域の自然環境や社会環境と連関した環境文化を見いだすことができる。環境文化の概念は、過去の遺構として尊重することとどまるものではない。これを機会に現代の人々の暮らしのありようとも結びつけて考えていきたい。たとえば、織工アパートについては、現代の都市や居住生活上の課題への対応において、紬の生産とともにあった当時の市民生活や就労の形態を伝える貴重な建築群であることが活かされるような方策が望まれる。

参考文献

- 1) 環境省那覇自然環境事務所 (2008) 奄美地域の自然資源の保全・活用に関する基本的な考え方 (案)
- 2) 小野寺浩 (2020) 自然保護と地方創生両立—奄美について考える—, 地域構想, 第2号, 大正大学地域構想研究所
- 3) 日本政府 (2019) 世界遺産一覧表記載推薦書 奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島
- 4) 野元麗生・和田千弘・小山雄資・木方十根 (2014) 奄美市名瀬における大島紬の織工アパートの分布と空間構成, 日本建築学会研究報告九州支部, 第53号
- 5) 野元麗生 (2015) 伝統産業「大島紬」の生産関連施設の建築的特徴と都市形成に関する研究, 鹿児島大学大学院理工学研究科建築学専攻 2014年度修士論文
- 6) 小山雄資 (2015) 「奄美大島における戦後の都市基盤・施設整備をふまえた景観概念の再構築」, 平成25年度国土政策関係研究支援事業 研究成果報告書
- 7) 小山雄資 (2022) 重層する奄美の環境文化とシマの建築群, 鹿児島建築士74, 鹿児島県建築士会 (2022年1月入稿)